

〈実践報告〉

地域ボランティア実践における学生ボランティアの実践報告

田中 雅章 田村 禎章

要旨

本研究は保育士養成校で開設された地域ボランティア実践における学生のボランティア活動の検証を行う。これまで学生が参加できたイベントがコロナ禍で次々と中止になり、学生が参加できたとしても制限されたボランティア活動にならざるを得ない状況であった。学生が参加した活動は地域と連携したイベントが多い。ボランティア活動に参加した学生の意識に変化が会ったのかを検証することを目的とした。

この取り組みは明確な教育的意図を持ち、理想とする保育者になるため必要な技能と知識を学ぶ活動である。このボランティア活動の実践によって参加した学生が保育者としての資質向上を目指しその成長過程を確認する。

実践活動は、ウェルカム四日市、赤堀ふれあい祭り、三重こどもの城オレンジリボンイベント、児童館祭りである。調査対象者はそれらのイベントに参加し、最後の授業で事後アンケートに回答した学生である。調査方法はスマートフォンからのWebアンケートにて回答を得た。学生はイベントに参加することで様々な経験を得ることができた。イベントでボランティアについての理解を深めたかどうかの検証結果を報告する。

キーワード 地域連携、イベント、ボランティア

1. はじめに

保育所や幼稚園などの保育現場では、季節の行事として夕涼み会などのお祭りのイベントが実施される。保育現場職員や保護者がイベントの企画・準備・運営を担うことが多い。しかし、お祭りのイベントで子供達が楽しめるように環境設定ができるようになるには経験が必要である。そのためには準備や運営の経験を重ね子供達に楽しんでもらおうとする心遣いやコミュニケーション能力を高めることが必要である。

本学の地域ボランティア実践では学生の将来を考え、保育の現場でよく実施される生活発表会の裏方仕事や夕涼み会などのイベント運営のノウハウを得ることである。また、専門家として保育を実践するためにはコミュニケーションや相手の事を考え、相手の立場で行動できるようになる資質と知識を学ぶ取り組みが必要である。

ボランティア活動の目的として、1番目は科目名にあるように地域とともに生きることを学ぶ事である。2番目には保育者養成と建学の精神もあるように地域の社会貢献を行う

ことである。3番目には社会貢献に参加することで豊かな人間性を高めることである。4番目には、保育者として社会性及び自主性を涵養し、地域に貢献し得る有用な人材を育成するなど地域貢献を通して、学生の成長、教育的効果を期待する。地域においてボランティア活動を行うことは、この短大が地域の社会資源のひとつとして機能することになる。この機能を効果的に活用することができれば、学生のボランティア活動が地域と短大をつなぐことができる。

例年ならば学生が参加できるイベントがコロナ禍で次々と中止になった。学生が参加できても制限されたボランティア活動にならざるを得ない状況下での実施であった。本稿ではこの様なWithコロナの条件下での取り組みであったが、学生の成長の変化を明らかにしたいと考えた。学生の体験をリアルタイムで収集できるようにボランティアに参加した感想をスマホから収集できる仕組みを実装した。また、授業の最終に地域ボランティア実践で体験したアンケートを実施し、学生の意見を分析した。今後の学生指導に生かせるボランティア体験に出来るように今回の分析結果を考察する。

2. 目的

本研究は、地域ボランティア実践を受講した学生の成長経過や学生の意見を明らかにする。さらにこの実践活動で地域へのボランティア活動として準備したイベントが適切であったのかの検証を試みる。さらに、ボランティア活動の実践によって、参加学生のボランティア活動に対する意識の変化を明らかにする。

3. 方法

(1) 参加イベント

学生が参加した4つのイベントの概要を示す

- ① ウェルカメ四日市 10/4,11/1,12/6の計3回
- ② 赤堀ふれあいまつり 10/22
- ③ 子どもの城イベント「心をつなごう！はっぴーオレンジデー」 11/7
- ④ じどうかんまつり2020「自然でつくろう！木であそぼう！ 冬を楽しもう！」 12/13

(2) 参加学生数

- ① ウェルカメ四日市 のべ45名（男子5名、女子40名）
- ② 赤堀ふれあいまつり 22名（男子2名、女子20名）
- ③ こどもの城イベント 9名（男子3名、女子6名）
- ④ じどうかんまつり2020 30名（男子1名、女子29名）

(3) 実践内容

- ① ウェルカメ四日市 海岸清掃 主催は楠地区まちづくり検討委員会で共催はNPO法人 四日市ウミガメ保存会が実施する四日市市楠町の吉崎海岸の早朝清掃である。四

日市ウミガメ保存会は、海岸の清掃活動だけでない。子どもから高齢者まで幅広く参加する海岸清掃や環境に関する勉強会、ウミガメの産卵調査等を実施する。海岸の環境保護や環境教育を進めている。清掃活動に関しては細かい指導はないものの、清掃後は学生に対する環境学習などの教育的サポートがある。

海岸清掃は、毎月第1日曜日の8時～10時（雨天決行）の午前中のみである。参加者集合確認の後、8時より清掃を始め、9時から海の勉強会行う内容である。ただ、海岸は危険な作業を伴うこともあるため、参加者はボランティア保険に加入する。

- ②赤堀ふれあいまつり 主催赤堀ふれあいまつり実行委員会と赤堀人權のまちづくり推進委員会が「笑顔でつなげるまちづくり」をテーマに地域の子供達が参加する祭りである。運営事務局は四日市市総務部人權プラザ赤堀である。今年は、新型コロナ対応できないとの理由で、常磐井地区や浜田地区などの近隣の祭りが中止になった。地元の子供達のために感染対策に配慮しながら規模を縮小しての実施することになった。

ふれあいまつりを応援する人々が実行委員会のメンバーなり、運営の企画・催行をしている。学生は市職員のふれあいまつり担当者が決めた人員割り当て表に従い、子ども縁日と短大ブースの運営スタッフとして活動した。子ども縁日の企画・準備はふれあいまつりの実行委員が担った。短大ブースの企画・準備は短大の教員が担当した。学生は企画や内容に関わることもなく、事前に決められたプログラムに従って準備から運営、後片付けまでの活動をした。

例年は、和太鼓演奏や人形劇をはじめ音楽やダンスなどのステージ、お楽しみ大抽選会や、飲食ブースで、子ども縁日コーナーなど幅広い年代の人々が参加し楽しめるようになっていた。今年は混雑するステージイベントと抽選会を全て中止し、飲食ブース、子ども縁日コーナー、ユマニテク短大（スライム作成）や四日市商業高校、地元企業などのボランティアブースのみとなった。それでも、例年よりたくさんの参加者がいた。しかし、飲食物を持ち帰る家族が多かったためか会場の滞在時間が短いこともあり、見た感じは例年よりも混雑していないように感じた。新型コロナ対策に対する参加者の意識が高いことで健康の安全が確保できたと言える。

- ③子どもの城イベント「心をつなごう！はっぴ～オレンジデー」 主催は公立児童館である三重県立みえこどもの城の職員が企画・運営をしている。三重県子ども虐待防止啓発事業オレンジリボンキャンペーンの関連事業として開催される。運営はみえこどもの城の職員が企画・催行をしている。例年は運動会があり、立野汁のふるまいや餅つきがあるが、今年はコロナの影響により運動会や飲食などが全て中止となった。

今年は、「心をつなごう！はっぴ～オレンジデー」のイベントの一つとして学生

によるステージイベントを開催した。演目内容は、手遊びや歌と踊り、絵本の読み聞かせ、紙芝居である。さらに学生の希望により、建物内でバルーンアートを配った。ステージイベントの演目内容は学生が事前に決めて当日まで練習する必要がある。演目の内容から次の演目のチェンジまでの動きをこどもの城の職員が確認を行った。当日のリハーサルに予定した時間は30分であったが学生の事前の練習が不十分で完成度が低かったため、こどもの城の職員の判断で演目の完成度を高めるためにこどもの城の職員が動作を確認しながら1時間ほどリハーサルを行った。ステージイベントの1回目は11:15から45分間行い、2回目は13:30から45分間行った。

イベント終了後は全員で会場の後片付けを行い、控室でこどもの城の職員と学生とで反省会を行った。こどもの城の職員から学生の動きについて適切なアドバイスがあった。その後、学生はこどもの城の施設見学を行った。

- ④じどうかんまつり2020「自然でつくろう！ 木であそぼう！ 冬を楽しもう！」 主催は四日市市内にある北部児童館、こどもの家、塩浜児童館、こども子育て交流プラザの4児童館が合同イベントとして企画・運営をしている。例年は事前申し込みの必要がなかったが、今年は新型コロナ対策として事前申込者だけが参加できる方法になった。各ブースには児童館の職員ついておりボランティアとして参加する学生に適切な指導をしてくれた。じどうかんまつりは、午前の部10:00～12:00と午後の部13:00～15:00の2部制であり、262名の子供達が参加した。学生はボランティアとして半日あるいは1日の参加であった。

(4) 調査手順

学生のWebによるボランティア参加報告と最後の授業で実施したWebアンケートを行った。設問は選択式と自由記述式を設けた。

4.調査内容

1. ボランティア参加後のWebによる自己評価の項目は、次の①～⑦」である。この項目は5段階で評価を行った。

- ①事前準備や学習をしましたか
- ②当日の準備は積極的にしましたか
- ③当日は積極的に活動しましたか
- ④参加者と積極的に交流できましたか
- ⑤当日の跡片付けを積極的にしましたか
- ⑥今後も積極的に参加したいですか
- ⑦この経験は今後役に立ちそうですか

2. 最後の授業時のWebによる回答項目は、次の①～②」である。この項目は5段階で評価を行った。

- ①ボランティアの大切さが、分かった
- ②ボランティアの大変さが、分かった
- ③ボランティアは体力が必要だと思った
- ④ボランティアは事前の準備が必要だと思った
- ⑤ボランティアはタオルなどの持ち物が必要だと思った
- ⑥ボランティアは、良い経験になった
- ⑦ボランティアは、自分を成長させた
- ⑧ボランティア経験は、仕事に役立つと思った
- ⑨積極的に手伝うことができた
- ⑩現場で、何をしたら良いのか分からなかった
- ⑪手つだうことが、おっくうだった
- ⑫子供と接するのは、難しいと思った
- ⑬相手の立場に立って行動するのは、難しいと思った
- ⑭ボランティアの内容を家族に話した
- ⑮2年生になってもボランティアに参加したい
- ⑯将来、ボランティアに参加したい
- ⑰ボランティアが、予想した内容と違うことがあった
- ⑱ボランティアで得るものはあまりなかった
- ⑲ボランティアに参加したくないと思ったことがある
- ⑳ボランティアは体が疲れる
- ㉑もっと楽なボランティアなら参加したい
- ㉒できればボランティアは参加したくない

5.結果と考察

(1) ボランティア参加後の結果

学生は各ボランティアに参加後、アンケートと感想をWebで収集した。学生はボランティア活動に参加した1週間以内にWebから参加後の感想を送るルールになっている。4か所のボランティア活動の結果を7つの質問項目に対して、5段階評価で回答した。有効回答は102名分で、その集計結果を表1に示した。ボランティア活動に参加した学生の自己評価を眺めると学生はほぼ自分なりに活動したと推測できる。

ボランティア活動別に「そう思うとややそう思う」の合計の割合を表2に示す。「事前準備や学習をした」で1番多かったのは「子どもの城イベント」の77.8%であった。これはステージイベントを行うために絵本の読み聞かせ、紙芝居、手遊び、ダンスなどの事前練習が必要不可欠であるためである。ただ、他の回答に比べ数字が低い原因は一部の学生

表1 ボランティア参加後の自己評価（全て）

	①事前準備や学習をしましたか	②当日の準備は積極的に行いましたか	③当日は積極的に活動しましたか	④参加者と積極的に交流できましたか	⑤当日の跡片付けを積極的に行いましたか	⑥今後も積極的に参加したいですか	⑦この経験は今後役に立ちそうですか
5.そう思う	31 30.4%	63 61.8%	84 82.4%	65 63.7%	69 67.6%	67 65.7%	78 76.5%
4.ややそう思う	37 36.3%	28 27.5%	14 13.7%	29 28.4%	25 24.5%	26 25.5%	20 19.6%
3.どちらでもない	26 25.5%	11 10.8%	3 2.9%	6 5.9%	7 6.9%	9 8.8%	3 2.9%
2.やや思わない	7 6.9%	0 0.0%	1 1.0%	2 2.0%	1 1.0%	0 0.0%	1 1.0%
1.思わない	1 1.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	102 100.0%	102 100.0%	102 100.0%	102 100.0%	102 100.0%	102 100.0%	102 100.0%

表2 ボランティア参加後の自己評価（ボランティア別）

そう思うとややそう思うの割合	ウェルカメ四日市	赤堀ふれあいまつり	子どもの城イベント	じどうかんまつり
有効回答数（n）	43	22	9	28
事前準備や学習をしましたか	60.5%	63.6%	77.8%	75.0%
当日の準備は積極的に行いましたか	88.4%	95.5%	66.7%	92.9%
当日は積極的に活動しましたか	97.7%	95.5%	88.9%	96.4%
参加者と積極的に交流できましたか	93.0%	95.5%	66.7%	96.4%
当日の跡片付けを積極的に行いましたか	86.0%	95.5%	100.0%	96.4%
今後も積極的に参加したいですか	88.4%	90.9%	88.9%	96.4%
この経験は今後役に立ちそうですか	93.0%	95.5%	100.0%	100.0%

の事前練習が明らかに不足しており、リハーサルの予定時間が30分を予定していたのに1時間もかかったことによる自己反省の結果と想像される。

「当日の準備は積極的にした」で1番多かったのは「赤堀ふれあいまつり」の95.5%で、2番目に多かったのは「じどうかんまつり」の92.9%であった。赤堀ふれあいまつりは屋外のためテントの設営から撤収までを行い道路のゴミ拾いまで行った。じどうかんまつりは屋内であるが、机やいすの設営から撤収までを行った。どちらも子供達に楽しんでもらうために各ブースの設営と撤収も必要であった。各ブース責任者の指示で学生は熱心に作業した。

「当日は積極的に活動した」で1番多かったのは「ウェルカメよっかいち」の97.7%で、2番目に多かったのは「じどうかんまつり」の96.4%で、3番目に多かったのは「赤堀ふ

れあいまつり」の95.5%であった。ウェルカメよっかいちはウミガメがやって来るようにとのコンセプトで行う海岸清掃である。また、環境教育でもある。1時間ではあるが、全員で清掃すると海岸がきれいになってくる。赤堀ふれあいまつりとじどうかんまつりは子供達が訪れるイベントであるため、子供達を待たせることがないようにテキパキと行動する必要がある。さらにじどうかんまつりは、児童館職員から適切な指導があった。

「参加者と積極的に交流できた」で1番多かったのは「じどうかんまつり」の96.4%で、2番目に多かったのは「赤堀ふれあいまつり」の95.5%で、3番目に多かったのは「ウェルカメよっかいち」の93.0%であった。じどうかんまつりと赤堀ふれあいまつりは子供達が訪れるイベントであるため、子供達と積極的に声掛けを行うことができたと推測できる。さらにじどうかんまつりは、児童館職員の子供達への行動を見習ったり、児童館職員から声掛けなどの適切な指導があった。

「当日の跡片付けを積極的にできた」で1番多かったのは「こどもの城イベント」の100.0%で、2番目に多かったのは「じどうかんまつり」の96.4%で、3番目に多かったのは「赤堀ふれあいまつり」の95.5%であった。こどもの城イベントの参加者は9名と少なかったが、その分全員の学生が積極的に児童館職員と後片付けを行った。じどうかんまつりと赤堀ふれあいまつりも全員が後片づけを行っていた。

「今後も積極的に参加したい」で1番多かったのは「じどうかんまつり」の96.4%で、2番目に多かったのは「赤堀ふれあいまつり」の90.9%であった。じどうかんまつりと赤堀ふれあいまつりはたくさんの子供達が訪れるイベントであるため、実習前に子供達と触れ合うことのできる活動である。実習前に子供達への声掛けができるイベントは良い経験になったと思われる。

「この経験は今後役に立ちそう」で1番多かったのは「こどもの城イベント」と「じどうかんまつり」の100.0%で、3番目に多かったのは「赤堀ふれあいまつり」の95.5%であった。こどもの城イベントは保育現場で行われている生活発表会に役立つであろうと思われる内容である。じどうかんまつりと赤堀ふれあいまつりはたくさんの子供達と触れ合うことのできるイベントであるため、現場の実習前に子供達と触れ合い子供達への声掛けができるイベントは大変貴重である。

(2) 最後の授業の結果

表3-1 ボランティア活動の振り返り（その1）

	① ボランティアの大切さが、分かった	② ボランティアの大変さが、分かった	③ ボランティアは体力が必要だと思った	④ ボランティアは事前の準備が必要だと思った	⑤ ボランティアは持ち物が必要だと思った	⑥ ボランティアは、良い経験になった
5そう思う	52 92.9%	51 91.1%	44 78.6%	42 75.0%	36 64.3%	51 91.1%

4ややそう思う	4 7.1%	3 5.4%	10 17.9%	14 25.0%	18 32.1%	4 7.1%
3どちらでもない	0 0.0%	1 1.8%	2 3.6%	0 0.0%	2 3.6%	1 1.8%
2やや思わない	0 0.0%	1 1.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
1思わない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%

- ①ボランティアの大切さが分かったの質問で、1番多いのは「そう思う」の92.9%であった。大学の講義でボランティアの話をどれだけ聞いても、実際に現場でボランティア活動を行うと学生はボランティアの大切さを現場の活動で身をもって感じたと思われる。
- ②ボランティアの大変さが分かったの質問で、1番多いのは「そう思う」の91.1%であった。①と同じように大学の講義でボランティアの話をどれだけ聞いても、実際に現場でのボランティア活動を行うと学生はボランティアの大変さを現場の活動で身をもって感じたと思われる。
- ③ボランティアは体力が必要だと思ったの質問で、1番多いのは「そう思う」の78.6%であった。大学の講義でボランティアの話をどれだけ聞いても、実際に現場でのボランティア活動を行ってボランティアは体力が必要であることを現場の活動で身をもって感じたと思われる。
- ④ボランティアは事前の準備が必要だと思ったの質問で、1番多いのは「そう思う」の75.0%であった。ボランティア活動を行うために事前準備に十分すぎるほどの準備をして参加する。学生は気軽に「先生、～ないですか」と簡単に聞いてくる。準備していれば良いが学校ではないので予想外の準備はない。学生は道具の必要性を感じた時、事前の準備の必要性を感じたと思われる。
- ⑤ボランティアはタオルなどの持ち物が必要だと思ったの質問で、1番多いのは「そう思う」の64.3%であった。屋外のボランティア活動の時は想像以上の汗をかくことが多い。準備に十分すぎるほどの準備をして参加する。学生は気軽に「先生、～ないですか」と簡単に聞いてくる。学校ではないので、予想外の準備はしていない。その他に現場で欲しいと思うものがあるため事前の準備の必要性をもって感じたと思われる。
- ⑥ボランティアは、良い経験になったの質問で、1番多いのは「そう思う」の91.1%であった。大学の講義でボランティアの話をどれだけ聞いても、実際に現場でボランティア活動を行うことによって、学生はボランティア活動の大切さを実体験として理解したと思われる。

表3-2 ボランティア活動の振り返り（その2）

	⑦ボランティアは、自分を成長させた	⑧ボランティア経験は、仕事に役立つと思った	⑨積極的に手伝うことができた	⑩現場で、何をしたら良いのか分からなかった	⑪手伝うことが、おっくうだった	⑫子供と接するのは、難しいと思った
5そう思う	44 78.6%	49 87.5%	38 67.9%	10 17.9%	8 14.3%	13 23.2%
4ややそう思う	9 16.1%	5 8.9%	15 26.8%	10 17.9%	4 7.1%	15 26.8%
3どちらでもない	3 5.4%	2 3.6%	3 5.4%	17 30.4%	6 10.7%	14 25.0%
2やや思わない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 23.2%	8 14.3%	10 17.9%
1思わない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 10.7%	30 53.6%	4 7.1%
合計	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%

⑦ボランティアは、自分を成長させたの質問で、1番多いのは「そう思う」の78.6%であった。実際に現場でボランティア活動を行うと学生は授業では得られない多くの体験がある。ボランティアの大切さを現場の活動で身をもって感じたと思われる。

⑧ボランティア経験は、仕事に役立つと思ったの質問で、1番多いのは「そう思う」の87.5%であった。現場で体験するボランティア活動は授業で学習する内容と異なる。現場は毎回同じことは起こりえない。ボランティア体験は授業では得られない多くの経験を感じたと思われる。

⑨積極的に手伝うことができたで1番多いの質問は、「そう思う」の67.9%であった。実際の現場で学生に対して細かな指示がないことは多い。つまり、ボランティア活動は参加する学生が自分自身で判断しながら行うことになる。その時自分が何をすれば良いのか的確に判断できないと積極的に行動することができないためである。

⑩現場で、何をしたら良いのか分からなかったの質問で、1番多いのは「どちらでもない」の30.4%であった。ボランティアへ出かける前に事前にレクチャーを行っているが十分でない。そのため、ボランティアの現場で自信をもって行動できた学生が少なかったことを示す。

⑪手伝うことが、おっくうだったの質問で、1番多いのは「思わない」の53.6%であった。ボランティア活動は学生の予想よりも重労働である。開始の頃は大丈夫であるが、終わりごろになると疲れてきて、少しずつ行動できなくなると予想された。

⑫子供と接するのは、難しいと思ったの質問で、1番多いのは「ややそう思う」の26.8%であった。短大に依頼があるボランティア活動の対象者で、1番多いのは子供達である。保育者を養成課程で学ぶ学生ではあるが、実際に子供達と触れ合うのは初めてである。したがって子供達への声掛けができないことが多い。

表3-3 ボランティア活動の振り返り（その3）

	⑬相手の立場に立って行動するのは、難しいと思った	⑭ボランティアの内容を家族に話した	⑮2年生になってもボランティアに参加したい	⑯将来、ボランティアに参加したい	⑰ボランティアが、予想した内容と違うことがあった	⑱ボランティアで得るものはあまりなかった
5そう思う	22 39.3%	31 55.4%	32 57.1%	21 37.5%	8 14.3%	3 5.4%
4ややそう思う	11 19.6%	13 23.2%	21 37.5%	27 48.2%	15 26.8%	3 5.4%
3どちらでもない	12 21.4%	6 10.7%	3 5.4%	8 14.3%	18 32.1%	10 17.9%
2やや思わない	7 12.5%	3 5.4%	0 0.0%	0 0.0%	9 16.1%	9 16.1%
1思わない	4 7.1%	3 5.4%	0 0.0%	0 0.0%	6 10.7%	31 55.4%
合計	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%

⑬相手の立場に立って行動するのは難しいと思ったの質問で、1番多いのは「そう思う」の39.3%であった。ボランティア活動で対象者となる子供達への声掛けや子供の気持ちを汲み取ることは、未経験者では難しいと思われる。せっかくボランティアの現場へ行っても思い通りにいかなかった結果であると思われる。

⑭ボランティアの内容を家族に話したの質問で、1番多いのは「そう思う」の55.4%であった。ボランティア活動の内容を家族と話題にできている学生は家族間とのコミュニケーションがうまくいっていると思える。少なくとも家族とコミュニケーションがうまくできないのにボランティア対象者である子供達とのコミュニケーションがうまくいくわけがない。

⑮2年生になってもボランティアに参加したいの質問で、1番の多いのは「そう思う」の57.1%であった。ボランティア活動が予想よりも重量労働だったため、2年生になってもボランティア活動を行いたいと考える学生は少ないと考えられる。

⑯将来、ボランティアに参加したいで1番の多いのの質問は、「ややそう思う」の48.2%であった。ボランティア活動が予想よりも重量労働だったため、在学中は参加しても良いが、就職してからはボランティア活動に参加したいと考える学生はいると考えられる。

⑰ボランティアが、予想した内容と違うことがあったの質問で、1番の多いのは「どちらでもない」の32.1%であった。ボランティア活動は学校で学習した内容から学生が想像する内容と現場で活動するボランティア活動の内容が異なることは日常茶飯事である。そのため、学生がボランティア活動に参加して、予想と異なることはあると言える。

⑱ボランティアで得るものはあまりなかったの質問で、1番の多いのは「思わない」の55.4%であった。ボランティア活動は学校で学習した内容から学生が想像する内容と現

場で活動するボランティア活動の内容が異なることは日常茶飯事である。そのため、学生がボランティア活動に参加して、予想と異なることはあると言える。

表3-4 ボランティア活動の振り返り（その4）

	⑱ ボランティアに参加したくない と思ったことがある	㉑ ボランティアは体が 疲れる	㉒ もっと楽なボラン ティアなら参 加したい	㉓ できれば ボランティア は参加し たくない
5そう思う	2 3.6%	6 10.7%	0 0.0%	0 0.0%
4ややそう思う	5 8.9%	20 35.7%	6 10.7%	1 1.8%
3どちらでもない	11 19.6%	17 30.4%	25 44.6%	9 16.1%
2やや思わない	11 19.6%	6 10.7%	12 21.4%	14 25.0%
1思わない	27 48.2%	7 12.5%	13 23.2%	32 57.1%
合計	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%	56 100.0%

⑱ ボランティアに参加したくないと思ったことがあるの質問で、1番の多いのは「思わない」の48.2%であった。ほとんどの学生はボランティア活動に対して参加したくないと考えていないが、一部の学生はボランティア活動に積極的でないことがわかった。

㉑ ボランティアは体が疲れるの質問で、1番の多いのは「やや思う」の35.7%であった。ボランティア活動は学生が考える以上に重労働である。ボランティア活動に1日参加するとその疲れはかなりのものである。普段から体力を鍛えておく必要がある。

㉒ もっと楽なボランティアなら参加したいの質問で、1番の多いのは「どちらでもない」の44.6%であった。ボランティア活動に楽とか大変とかはない。一部の学生は体力的に楽なボランティア活動に参加したいと考える学生がいても不思議ではない。

㉓ できればボランティアは参加したくないの質問で、1番の多いのは「思わない」の57.16%であった。地域ボランティア実践の科目は必修科目であるため、ボランティア活動に参加しなければ単位が取れない。しかし、半分程度の学生は自ら進んでボランティア活動に参加したいと考えていると思われた。

5. まとめ

地域ボランティア実践によるボランティア活動は今年で4年目である。新型コロナの影響で各イベントが中止になる中、学生や参加者の衛生管理に対処しながらボランティア活動を行った。その結果、1名の感染者を出すこともなく無事に終わることができた。

今年度は新型コロナの影響で学生が参加できたボランティア活動は4か所のみであった。今回、参加した学生にとって4か所とも適切なボランティア活動であったと評価する。特

にこどもの城やじどうかんまつりは専門職員から子供への声掛けの仕方や適切な指導が得られた。これらのイベントに参加した学生は実習に向けた貴重な体験として得られるものが多かったために参加した満足度が高かったと言える。

保育士養成課程に入学した全ての学生が、常に高い意識を持ってボランティア活動に取り組んでいるとは限らない。今回の解析で明らかになった事はボランティア活動に対して、参加意識の低い学生はボランティア活動に積極的に行動することが少ないように思われた。学生のコメントには、子供達に声掛けがうまくできなかった。準備や撤収で積極的に動くことができなかった。などの行動における反省のコメントが確認できた。今後は各ブースに職員が配置され、学生に対して適切な指導をしてくれるボランティア活動には積極的に学生を参加させたいと思う。

参考文献

- (1) 吉岡良介他,幼稚園教育実習後のボランティア活動の意義について, 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,pp.201-214,2020.3
- (2) 川上輝昭, 子どもから学ぶ力を育てる保育者養成の試み,名古屋女子大学紀要,pp.127～139,2020